
あたいと大ちゃんのあそびにつき

ルーミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたいと大ちゃんのおそびにつき

【Nコード】

N7036Z

【作者名】

ルーミア

【あらすじ】

氷の妖精チルノ、その親友である大妖精。

この物語は2人の笑って泣けない友情秘話を描いたものである…と言いたのだが、基本的にはバカしかやらない。

作者は東方を詳しく知りません。原作のeasyモードをクリアして歓喜狂乱舞した程度です。キャラの詳しい説明は【ピクシブ百科事典】を参考にさせてもらいました。

だい？わ 【先生になりたい】（前書き）

東方の原作（初期だったかな？）をプレイして、1面のルーミアと2面のチルノをボッコボコにした記憶があります。勿論easyモードで。

あいつらww俺にボコられて泣いてやんのwww愛い奴よwwだが、3面の中国。テメエはダメだ。強すぎる。

そんな作者が別作品の連載で休息の代わりに書いた作品。短いです。

だい？わ 【先生になりたい】

人間界で言うところ、季節は夏。幻想郷はジリジリと今日も暑い。だが、とある妖精の住み着くこの湖。

近づけば分かるが、非常に心地よい気温。いや、ちよいと肌寒いくらい。

賢明な読者なら、もうお気づきであろう。

そう、この湖こそが本作の舞台となる【霧の湖】なのだ。

朝日が昇り、小綺麗な湖の上空を飛ぶのは一人の少女。

髪は薄めの水色で、ふわふわのウェーヴがかかったセミショートヘアーに青い瞳。

背中には氷の結晶に似た大きな羽を持ち、頭の後ろに同じく青い大きなリボンを付けている。

服装は白のシャツの上から青いワンピース（スカートの縁に白のぎざぎざ模様）を着用し、首元には赤いリボンが巻かれている。

霧の湖の端、陸地と繋がる緑の広がる場所。

そこに佇^{たたず}んでいた、これまた同世代くらいの少女へと近づいていく。緑髪をサイドポニーにまとめた少女もその存在に気付いたようで、大きくこちらへ手を振ってきた。

満面の笑みを浮かべた『チルノ』が、「大妖精」の元へと飛んできたのだ。

『大ちゃん！おっはよー！ よいしょっと』

「あ、チルノちゃん。おはよう」

『ねえねえ大ちゃん、さつきねっ！あたねっ！えっとなっ！凄いのをねっ！えっとなっ』

「あはは、少し落ち着いて話しなよ」

『すっごいの見つけたんだ！大ちゃんにも見せたげる！ジャジャー！』

「…うん、これはカエル？これがどうかしたの？」

『大ちゃんにそっくりでしょ！？あたいってば天才ねっ！』

「…お、おおっふ…」

注意、とても仲の良い二人です

【 だい？わ 先生になりたい 】

『ほら、顔のここをこうやって…ここもこうしてこうやると…大ちゃん最終形態だアー！』

「ふふ、チルノちゃん。おふざけが過ぎるよ」

『あ、それはそうとね、大ちゃん』

大ちゃん最終形態を投げ捨てたチルノは、額に青筋を浮かべた大妖精へと別の話題を振りだす。

最終形態は最終形態で、やっと解放されたぜ…と自分の顔を本来のカエルへと戻していた。

『さつき人里まで下りてみたんだけど、いやー、あたいぐらいの人間が一杯歩いててさー』

「ふんふん、村に下りてみたら小さな子供たちがたくさん歩いてたと」

『そうっ！それでね？その人間たちが入ってった古い建物があつて、みんな一緒に勉強してて、建物の看板に真っ黒な文字で、てらちいさいんあ、』って』

最後の方、発音を誤魔化したな

「…うん　もしかして、‘寺子屋’のことかなあ？」

『？　寺小屋ってなに？』

「一言でいうと、子供たちが集まって学問に励むところ。ほら、この間拾った本に文字がたくさん羅列されていたでしょ？　あれを使つて、大人が子供に教えを説くんだよ」

『へエー！大ちゃんすっげエ！物知り！しゃっべエー！』

鼻息が通常の六倍ほど荒くなる。

『じゃあ、今日は寺子屋ごっこして遊ぼうか！どうせ暇でしょ！？』

「どうせっ　？　う、うん　まあ、暇だよ」

『そんなら　あたいが大人を演じるわっ！　大ちゃんは大人に弄ば』

もてあそ

れる健気な^{けなげ}ピエロ、俗に言う子供を演じてねっ！』

「うんっ！…え？」

『よっし、スタートオ！』

チルノの叫びが湖にこだました。

つと、青のワンピースから左肩だけを脱がし

チルノちゃん！？

自分の小指を唇へと運び、熱い吐息を一つ

チルノちゃんんっ

！？

『…っはあ あたいが、大ちゃんに大人の‘良い事’を教えてあげる…』

「一回止めて、止まってチルノちゃん」

『緊張しなくていいのよ…大丈夫…あたいに任せて…』

「ちよ、そんなとこ触らないで あの、まじで…」

『ほら…ここがもうこんなに…』

「触んなっ！！」

『ぐああ！ いま殴った！？ 大ちゃん、いま殴った！？』

気のせいだよ（超いい笑顔）

そっか！ あたいうってば勘違いしてた！（超いい笑顔）

お互いにえへへっつと笑顔が溢れる。なんて仲良しな2人。

「でもチルノちゃん、その大人はダメな大人だからやめた方が良くんじゃないかな。一部のM男しか喜ばないんだよ？ チルノちゃんみたいな体系でやられたら、下手すりゃ誰得だよ？」

『そなんだ！？ やつベエ大ちゃん、まじ物知り！ 博士^{はくし}！！』

「今度は私が大人…ってか先生をやるから、チルノちゃんは生徒をやってね」

『「せーと」ってなに？』

まじかこいつ

「…えっと、私が学を与える人、チルノちゃんが学を与えられる人ってこと」

『言い換えれば大ちゃんが能動態！ あたいが受動態ね！』

「…ん？なにそれ……」

『さらに言い換えれば大ちゃんが責め！ あたいが受けね！』

「…そう…かもね？」

『っしやア！おっけーね！』

大妖精は少し考えるそ素振りを見せ、コホンッと咳払い。
左手に何か書物を持っているテイストを装いつつ先生役に入った。

「んーっと… い、1 + 3 〓？」

『解せぬっ！』

「… 1 + 1 〓？」

『いつぱいつ！』

「どうするチルノちゃん？ 何か別の遊びしない？」

『大ちゃん？ なぜ急に大人を演じなくなったの？ 演じる人生に
疲れたの？ あ、妖生か』

「ねえねえ、別の遊びにしよう？」

『じゃあ今度は2人で大人の事情に振り回される悲劇のマスコット
ピエロを演じよう！！』

「さつきから気になってたんだけど、なんでチルノちゃんが‘子供’
という単語を変換するとそんなに重くなっちゃうの？ なに、ピ
エロって」

『大人の先生は別に用意だっ！そらっ！出てこい！』

《ぐわア》

近くにいた湖の妖精をチルノが引っ張り込む。

本編では立ち絵の一つもないので、容姿は読者各々の妄想力で補っ
てほしい。

まあ、大妖精も立ち絵が（この地の文は削除されました

『かくかくしかじかまるきゅーだから、あたいたちに教えを説いてよね！ 最初からこの小説読んでれば大体察せるでしょ！』

《解せぬっ！解せぬっ！》

『えエー！？ あんたって本当に？ほんっとねエ』

《解せねエ！まじで！》

今の一言は悔しいだろうなあ、と大妖精はモブ妖精に同情。心から。

『いい！？ あたいらを満足させるような授業をするの！？ でなきゃ冷凍保存だからね！』

《上等だ嬢ちゃん、あとで泣きながら俺の靴を舐めることになるぜ》

「この妖精、本当にモブ？ 貫禄かんろくが出てるんだけど」

モブ妖精が低い声で席につけ…と呟く。

と言っても、この湖に席などないので、地べたに腰掛ける事になるのだが。

いつのまにやらサングラスを装着したモブ妖精に、大妖精がそっと耳打ち。

「…適当にやったら抜けちゃっていいからね、チルノちゃんもすぐ飽きるだろうし（ヒソヒソ）」

《…それは出来ねエ相談だ大妖精、俺は確かにプー太郎だが、一度引き受けた仕事は最後まで突き通す主義なんだ。それが自分^{てめえ}との約束なんぞな（ヒソヒソ）》

「ねえ、あなたもしかして自機の座を狙ってる？ なんなのそのキヤラは（ヒソヒソ）」

《自機…か… そんな玩具^{もの}のために争ってんのかと思うと泣けてくるぜ…（ヒソヒソ）》

「…確かにな。でも、それでも譲れねえ玩具^{もの}つてのが、あたいにはあるんだ。何て言われようが、この生き方を変えるつもりはねエ（ヒソヒソ）」

「…チルノちゃん、いつから聞いてたの……？」

ああ、こうなったらさっさと授業もどきを終わらせてしまおう！
所詮はモブ妖精の知恵、ヤフ知恵の方が幾分マシな知能を装備しておるわ！

「かかってこいモブ妖精！ チルノちゃんを遥かに凌駕する私の脳を舐めるなあ！」

『そうだぞオ！ 大ちゃんの頭脳にかかれば解けない問題などないツ！ な、明智君（チルノ目一杯低音声）。はい、チルノさん！（チルノ裏声）』

《原点とx軸上の点 $H(1, 0)$ の間に原点からHに向かって順番に点 $H_0(0, 0)$ 、 $H_1(x_1, 0)$ 、…、 $H_{n-1}(x_{n-1}, 0)$ が等間隔に並んでいる。ただし、

$H_n = H$ である。

ここで、関数 $f(x) = x^2$ に対して、線分 $H_k - 1$ H_k ($k = 1, 2, \dots, n$) を底辺とする高さ $f(x_k)$ の長方形の面積を R_k として、 $S_n = R_1 + R_2 + \dots + R_n$ とおく。
また放物線 $y = f(x)$ 、 x 軸、直線 $x = 1$ と囲まれる領域の面積を S とする。次の問いに答えろ。

1 S_n を n の式として表せ。 2 $S_n - S > 100$ 分の 1 となる最小の n を求めろ。 3 俺のフルネーム

解ける気がしない。これが大妖精の最初の言葉であつた。
溶ける気がしない。これがチルノの最後の言葉であつた。

『チルノと!』 「大妖精の!」 『今日の教訓!』

【身の丈に合った遊びをしよう?】 『あたいに学問は早かったわね!』

だい？わ 【先生になりたい】（後書き）

読破おつかれさまでした。

チルノ好きに、大ちゃん好き、心の底からゴメンなさい。
でも、これが僕にとっての2人なんです！！

そこは譲れません！ まあ、二、三万積まれば譲るけど。

では、次回（？）に会いましょう！ ばいばい！

だい？わ 【やせたい】（前書き）

先ほど、東方風神録にてケロちゃんとタイマンを張りました。

勝てるように設定されてないだろ、あれ。

アンインストールしたるか……という憤怒の心情を抑えつつ僕が開いたファイルは東方紅魔郷であつた。

行く先は決まっている、2面のチルノだ。

ああチルノよ… やはり君は落ち着くなあ…

ボツコボコにしたりました。

決してチルノが嫌いな訳じゃないんです。

大好きなんです。好きすぎて会いに行っちゃうんです。

そこん所を勘違いしないで下さいね。

だい？わ 【やせたい】

幻想郷の一部、透き通った水に濃い霧、草の生い茂った自然の大地が広がる霧の湖は今日も平和です。

湖の妖精たちがあつちへ行ったりこつちへ行ったり……特に目的もなく飛んでいるところを見ると

【ほぼ無頓着にネット上を転々とする人間界の住人】を連想してしまいます。

それぐらい湖は平和です。平和が一番です。

そんな妖精たちがあれよあれよと過ごしている中、1人黙々（もくもく）と浮き上がったり下りたり…浮き上がったり…下りたり…を繰り返す「大妖精」の姿が湖の島上にあった。

首を傾げたかと思うと、大妖精が次に向かったのは湖の水面。

島の大地から水面を覗きこみつ、自分の頬を人差し指でぷにぷに

ツ！？

咄嗟に撫でたお腹に腰周りを確認し、大妖精の疑問は確信へと変わる。

まるで自身の死を悟った病氣持ちの老人のように…その眼差しは闇に覆われ一筋の光も無い。

そこに現れた同世代くらいの少女、氷の妖精『チルノ』。

大妖精が話しかける。

「チルノちゃん、笑わないで聞いてね？」

『どしたの大ちゃん いつもの数十倍顔がマジだけど 便秘？』

「あの、実は体重が『げはははははwwwwwwワロ』氏ね」

『ジョークジョーク大ちゃん！ただの妖精ジョークだよ！あははははだから首を握りしめるのやめて、妖精って簡単に意識飛ぶから、^{はかな}儂い世界に咲いた一つだけの華^{きせき}なんだから』

「^{ひど}酷いよチルノちゃん… せっかく勇気を出して相談したのに…」

『なるほど、冗談の通じない状態ってわけだね！ だから徐々にあたいの首を絞める握力が上がっていつてるのか！ 安心して大ちゃん！ あたいが良いダイエット方法を教えてあげるから！』

「え！ 本当に!？」

『あたいは天才なんだから何でも知ってるのよ！ それに親友の大ちゃんの頼みなんだから断るわけないでしょ！ だからそろそろ本当に手を離してください全身が麻痺してきました』

「ありがとう… ありがとうチルノちゃん！」

『おかしいな、あたいは周囲からバカって呼ばれてるけど 泣き笑いしながら親友の首を絞める妖精なんて さすがのあたいでもおかしいなと思うよ、うん だから離してよ大ちゃん、全身どこるか舌まで回らなくなってきました あたいの本能が危険信号を発しているんだ』

注意 とても仲の良い二人です

【だい？わ　痩せたい】

ここは森の広場。

周囲が高い木で囲まれ、それ以外は本当に何もな森のなかにポツカリと開いた広場だ。

恐らく湖の近くにあるのだろう。たぶん、ね。

『さてとだ大ちゃん！』

両腕を腰に当て、えっへん！と胸を張るチルノ。

『状況を整理すると大ちゃんは豚である己の体系を恥じたために可憐でシュレンダーな体系を維持するあたいにこの呪われし因果を解き放つよう協力を依頼してきたってことだね！？』

「うん、間違つてないよ」

大妖精の顔がここまで歪んだのは初めてだ。

ラディツツ如きことのスカウターであれば瞬間で粉々に出来るほどだろう（推定）。

『最近^{最近}は里の方で【部分痩せダイエット】が流行ってるみたいだね！　気になる体の豚部分を集中的に痩せさせるって方法らしいよ！』

「へーそうなんだ！　チルノちゃんって人間の風習とか流行に詳しいよねえ」

『まあ、定期的にイタズラしてるからね！　この間も店主の目を盗んで商品をパクってきたわよ！　メガネ曇らせて焦ってたわ！』

「うわあ、氷の妖精とは思えないイタズラ」

『じゃあ！ 大ちゃんは自分の体のどこが豚だと思うのっ！？』

大妖精はそわそわと体を動かしながら、自分の腹や尻を軽く触つてみた　　っう……

その時、大妖精に電流走る。ざわ…ざわ…

「やっぱり太ももの部分とかなあ、悔しいけど」

『そんな豚足を携^{たずさ}えた大ちゃんにはこれ！ブルブル振動する布オ（チルノダミ声）　これを気になる部位に巻きつければ自然と脂肪はピチュってしまっんだ！（チルノダミ声）』

「わー凄い凄い！　まるで夢のような装置…全ての乙女が恋い焦がれるような装置ね！　でもお高いんでしょう？」

『こーりんの店からパクってきたから盗品なので　無料で大ちゃんに提供しちゃいます！』

「森近さんのツ！？　あ、さっきパクったって言ってた商品でこれか！」

チルノが取り出した布（香霖堂の煽^{あお}り文句によると脂肪燃烧マシン）は、見た目だけならただの布と変わらない。

広場に座り込んだ大妖精。

ものは試しとスカートをたくし上げ　太もみに巻いてみる。

「えーっと、これでこうして…　準備出来たよ　チルノちゃん」

『よし!』

「……………」

『……………』

「……………」

『ほら、大ちゃん! 振動させないと!』

「え!?! 私が振動させるの!?!」

『他にどんな方法があると!』

「あれ!?! 私が間違ってるの!?! 自動で振動して脂肪を燃焼する道具だと思ったのに!」

『甘えるな大ちゃん! そんな楽をしていたら減るもんも減らないでしょ! 楽しんで手に入れた夢ほど残酷な悪夢はない、あたいはそう思う』

「そ、そうなのかなあ…」

大妖精は太もみに巻かれた布を手で揺らしてみる。

「……………」

布と一緒に揺れる自身の肉が切ない。

『まあ、こんなことで痩せるわけないわね』

「……………」

『むしろ こんな方法で脂肪が燃焼されたら幽々子とか毎晩毎晩ジョギングなんてしないでしょーよまったくもうごめんなさいごめんなさいごめんなさい』

「良かったねチルノちゃん、私たちが親友じゃなかったら謝罪しても許さなかったよ?」

『ごめんね ごめんね大ちゃん でも親友だったら相手の顔を握りしめて地面に叩きつけたりしないと思 思うんだけ
ちよ、喋らせ』

「まさか悪戯いづなで威張いってたんじゃないよね? 別のダイエット方法があるんだよね?」

『 ありま ます あります!』

チルノが解放される。

あと一撃で地面の穴の数が二桁を超えるところだった。(ぎり顔面セーフね!byチルノ)

『幽々子ふらんもその効果に絶賛したと言われているジョギング! これを上回るダイエット方法は幻想郷に存在しないわ!』

「えー… 私 運動って苦手なんだけど…」

『苦行を乗り越えた者にこそ至福の時は訪れる 幽々子ふらんだって苦行ジョギング』

を乗り越えた後は至福おやつの時に浸ひかっているわよ！」

「なんでさっきから西行寺さん名前に変な呼び名をつけてるの？
あと、それ本当に痩せてるの？ リバウンドの典型的な例なんだけ
ど」

『走れば大ちゃんが気にしている足回りの豚肉在庫処分が出来るわ
！』

「もうスルーしないわよ さっきからちよくちよく私のこと豚呼ば
わりしてるでしょ」

『じゃあ行くわよ大ちゃん！ あたいの後に続いて！』

チルノは自慢の氷性6本羽で飛び上がり チルノちゃん！？
ジョギングは！？

『あたいら妖精は宙を走るティンカーベル！ さあ、大ちゃん！
行こっ！』

「これって足の脂肪と関係ないよね！？」

とりあえず大妖精も飛ぶ。

森の木々を10数メートル進んだ頃ころだろうか、とある木の前でチル
ノが空中静止。

『あ、見て見て大ちゃん この葉っぱってね 凍らせて砕くと面白
い音が鳴るんだよ』

「へえ、そうなんだ でも葉っぱを砕く音の聞き分けが出来るのは

チルノちゃんぐらいだよねえ」

『えっとー この花は凍らせると自然に壊れちゃうんだあ 砕きたくなつた時はゆっくり凍らせないとダメよ!』

「そうなんだ チルノちゃんは色んな植物に精通しているね」

『あ!この実! 食べるとおいしいよ! あぐ… 大ちゃんも、ほら!』

「あむ… あ、甘〜い」

『こつちの実はちよつと辛いよね! あぐぐ…辛ッ!』

「どれどれ〜 あむむ…辛いッ!」

『でも二つを同時に食べるとおー… 酸っぱい!』

「酸っぱい!酸っぱい! でもクセになるこの味!」

『でしょ! あたいつたら天才だから新しい食の文化まで開化させちゃうのよね!』

ところでチルノちゃん、ジョギングは? (迫力のある顔)

お腹へつちつたw サーセンww (実を口の中一杯に頬張つた顔)

もういいよ…つと大妖精は告げると、木の実を頬張り続けるチルノを尻目^{めづり}に降下。

頭の上に食べカスが落ちてきたが怒る気力も無い。

はあ… ダイエットの仕方なんて思いつかないしどうしよう…
ん？

大妖精の視界に入ってきたのは、森の中で木に腰掛けているモブ妖精。

モブとは思えないサングラスに言動、知恵をあわせ持つ妖精なのだが詳しくは1話を参照。

《お、どうした大妖精 頭汚ッ！》

「なによ！ 出会いがしら急に ほんとだ、頭汚ッ！」

チルノの食べカスを振り払う。

《なるほどな、チルノの協力のものダイエットを決行したは良いものの、^{くわん}尽く失敗したと》

「すごい 一言も説明してないのに現状を把握してる」

《……っにしても大妖精、おまえ… そこまで太ったか？ 俺の目にはそう見えないんだが》

「えエゝ！？ ‘ラーメンマン’と‘モンゴルマン’ぐらいの違いがあるわよ！？」

《うーん よく分かんねエな… まあ、ちよいと座れや》

モブ妖精は懐に手を入れ取り出したのは、一枚の写真。

「……人間？」

大妖精の言う通り、写っていたのは一人の人間の女の子。
年は人間で数える12、13だろうか。

こちらに向かつて微笑みかけており、その肩にはサングラス姿のモブ妖精が腰掛けている。

《こいつは俺の娘だ　今年でおまえとタメを張る年だな》

「どこまで本当なの？」

《全部だ　なんだ、妖精が人間とガキを作っちゃダメなんて決まりでもあんのか？》

モブ妖精がタバコを咥え、ライターを懷から取り出す…が、火がつかない。

痺れを切らしたのか指をパチン　と鳴らしタバコの先端を発火させた。

《っふうー…　一昔前に、こいつも大妖精と同じこと言いだしてな　やれダイエツト始めるだの、やれ晩飯いらねエーだの、お父さんの口臭いだの、友達家に呼ぶからお父さん部屋から出ないでよねエーだの》

「そうだったんだ…」

《まあ年頃の女の子だからな、仕方ねエーって最初は思ってたのよ　綺麗な姉ちゃんねえのたくさん載ってる雑誌とか部屋で読んでてな、憧れてたんだろーよ》

「なぜ部屋の中の様子まで知っているの？」

《だが俺は良い気持ちしなかった 何故かわかるか？》

「ど、どうしてでしょうか？」

タバコの煙を吐く。

《自分の子が日々痩せ細っていく姿なんて見てて気持ちいわけねエだろ？ 俺には分からねエが、どーも年頃ってのは周囲に感化されやすいんだ 合理化ってやつか？ 自分を懂れの存在に近づけたいって欲求にかられんのよ》

「そう… だつたんですか…」

大妖精は気付く。

私は無意識のうちにチルノちゃんに嫉妬していたのかもしれない。自分の体重がちよつと増えたからってチルノちゃんに裏切られた気持ちになって…。

《… 大妖精 あんたも同じなんだろう？ 自分の本当の気持ちに氣付いたんじゃないのか？ 大丈夫、あんたは太ってなんかねエ 女の子ってのはちよつと丸っこい方が可愛いんだぜ》

「… はい、ありがとうございます」

《… つへ、ガラにもなく説教しまつたな、重く考えんなよ ただの子持ち妖精の戯言だ（じいはあそびごころ）》

「いえ、ありがとうございます！ 何だか気持ちがスッとしました

！
」

《おう、分かったら次回作の自機の座をくれ》

大妖精は満面の笑みで飛び立つ。

背後でモブ妖精が叫んでいるが、彼女の耳には入っていない。

向かう先は決まっている、チルノの元だ。

ずいぶん酷い事をしちゃったし謝らないと… ごめんね！チルノちゃん！

「あ、いた！ チルノちゃあーん！」

先ほどと同じ場所、美味しい実おいのなる木の上にチルノは飛んでいた。

「ん？ どうしたの大ちゃん 便秘？」

「どうして私と会つと第一声が便秘なの？」

それから二人は夜よが更ふけるまで実を食べ続けた。

時には笑いあい、時には苛つ立ちを募らせ、最後には笑いあつた。
2人を隔へてるものなど何もない。

幻想郷の一部、霧の湖。そこには妖精が住み着いています。

それは 仲が良く、信頼しあい、仲間思い、他人を思いやることの出来る妖精です。

『だからさ、困ったときは助けあうべきだと あたいは思うのよね』

「勿論だよチルノちゃん 神の気紛れで集められた妖精同士、協力し合っていないと」

日にちが変わって次の日。

チルノと大妖精の腹は膨らみ、妊娠何か月ですか？ 2年ちよつとです が成立しそうなほど立派に脂肪を蓄えられていた。

そんな彼女たちの前には、眉間にシワを寄せたモブ妖精。

《いったい 木の実をいくつ食ったらこうなるんだよ…》

『あの一帯になってた実は全部ね！ やっぱり乙女は甘いもの好きなのね！』

《うっせーよバカ》

一週間ほどかけて、2人はモブ妖精監視下の元 熱血特別指導ダイエツトを行うことになる。

無事にお腹は元に戻りました。

『チルノと！』 「大妖精の！」 『今日の教訓！』

【日々の食生活を改善しよう？】 『妖精は太らないって設定を神主が作れば良いのにね！』

だい？わ【やせたい】（後書き）

読破お疲れ様です。

なんだか東方二次創作にハマった気がしなくもない作者でした。

ではまた次回に、さようなら！

だい？わ 【光の三妖精あらわる】（前書き）

本当にごめんなさい。

光の三妖精ことサニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアが見事にキャラ崩壊の一途を辿っています。

苦手な方は、お手数ですが戻るボタンをクリックなされた方が宜しいかと。

ちなみに、三妖精の詳細を今の今まで知りませんでした。

ずーっとチルノの友達か何かかと思ってたんですけど、違うんですね。

うむむ…東方とは奥が深いのう……

かなりマニアックな小ネタが入っているので、分からない読者が多数いると思いますが、そこは気合と根性とチルノへの愛で乗り越えてください。

だい？わ 【光の三妖精あらわる】

ここは幻想郷。

人名^{げんそつぎょう}つぼくすると玄宗京。なんだか お坊さんみたいですネ。

そんな不思議な空間の一部、【霧の湖】から少々外れた位置に木々に囲まれた広場があった。

普段から利用されているこの広場は、妖精たちの溜^たまり場である。同士と戯れる妖精、個々で業^{ごう}に励む妖精、はたまた息抜きの場に活用するなど、霧の湖に住み着く妖精からは大変 重宝^{ちゆうぼう}されている広場なのだ。

『それー大ちゃん それそれぞれー！』

氷の妖精『チルノ』が手に握っているのは、里から借りてきた（チルノ談）オモチャ。

先端^{ふたまた}が二又に分かれた木の棒に糸^くを括りつけ、石か何かを的に飛ばして遊ぶのだそうだ。（パチンコ）

「あ、危ないよチルノちゃん やめてよー」

チルノの飛ばす小石を体に当てられ、広場を逃げ回る大妖精。的にされた大妖精は本気で嫌がっているようだ。

人間の子供が作ったとはいえ、これがまた地味に痛い。良い子の妖精は真似しないように。

だが、そんなことはお構いなしにチルノは笑顔で大妖精を追いかける。

る。

『いええええい！ レッツパアリーー！！』

「やめて！ やめてったらあ！」

『チャージショット！ドウクシッ！ドウクシッ！』

「ボムッ！」

『ぐあゝ』

大妖精の投げた石がチルノの顔にクリスティカルヒット。

「おらあ！」

倒れたチルノに蹴^けりを一発。

「ダメでしょチルノちゃん 相手が嫌がる事をするなんて、もつての外^{ほか}だよ」

『あたいの道を厚生^{こうせい}してくれたのは嬉しいけど 最後の蹴^けりって意味あつた？』

「真^{まこと}の支配者とは絶対的な暴力をもつ者なの 皇帝なの、ナポレオンなの」

『そつか！じゃあ最後の蹴^けりは賢明な判断だったんだ！ すっげえ大ちゃん！暴君^{ぼうくん}！』

‘真の支配者’って部分には触れねえのな……

木に寄りかかる《モブ妖精》の呟きに答える者はいない。

注意　とても仲の良い二人です

【だい？わ　光の三妖精あらわる】

「ちょーっと待ったアー！」

広場にいた全妖精の視線が集まる。

突如　現れた3匹の妖精に対してだ。

『あ！　あいつは！』

「え、チルノちゃんの知り合い？」

「ふっふっふ…　お初に見える妖精も多々いるようなので、名前を教えてあげるわ！」

3匹の真ん中に立つ妖精。

オレンジのかかった金髪のセミロングで、その両側を赤いリボンでふたふさ二房のツーサイドアップで括くっている。

その頭の上には白のヘッドドレス。瞳は青、大きく笑う口からは八重歯。

白のブラウスに赤いスカート、首元には黄色いリボンを巻き、赤い腰巻が腰にある。

そんな彼女は、ポカンとする妖精たちの前でビシッと指を立てる。

「私の名前はサニーこと、サニーミルク」！ 知的で狡猾なサニーちゃんとは私のことよ！」

『あれ？ トルゴンアシュ君じゃなかった』

「むしろ誰それ、生物？ 恐竜？」

「あ、チルノじゃん！ 久しぶり〜！」

サニーがチルノ目掛けて手を振る。

「向こうはチルノちゃんのこと知ってるみたいだよ？」

『妖精違いじゃないかな ‘チルノ’ なんてベタな名前たくさんいるし』

「でも あっちの妖精こっちに近づいてくるよ？ 間違いなく 知り合い同士が街中でばったり会った時の反応だよ？」

『初めて‘シュレック’を見た‘フィオナ姫’だって最初は人間だと勘違いしたんだ 誰にだって間違いはあるさ』

「うーん 私、シュレックの映画見たことないから分からないなあ」

「でも、あの時のシュレックは騎士の鎧を顔に装備してたわけだから、あれは間違えても仕方ないんじゃない？ 自分を助けてくれた人物だもの、そりゃあイケメンだと妄想するでしょ」

『うわあ、会話に入ってきた　かなりナチュラルに』

自己紹介のタイミングを失ったので補足説明しておくと、サニーの後ろに控える妖精Aが「ハスターサファイア」、妖精Bが「ルナチャイルド」だ。

容姿が浮かばない読者はググろう。

「忘れちゃったの!?　サニーだよ、サニー!　原作の方でも係^{かかわ}ったじゃん!」

『……あ　テメエ!　あたいの家返せエー!』

「ぐふう　思い出してくれたなら何よりよ」

腹パン一発を代償に、サニーはチルノの記憶を呼び覚ます。

『ところで何の用かしら!　サニー!　この広場は、あたいたち霧の湖の妖精の場所なんだけど!』

「ふん、そうね!　その通りよ!　今日ここに来た理由は言わずもがな、この広場に用があるのだからね!」

『な、なんだとー!?　まさか、この広場に用があるのか!』

「ええ、そうね!　ご察しの通り、私たちはこの広場に用があったの!　鋭いわね!」

『くっそオ、…あ、って事は真の目的は……!』

「そのとおり、真の目的はこの広場よ……」

大妖精は察する。

あー、このサニーって子もバカなんだ

「私たち『光の三妖精』には魔法の森なんて狭すぎて狭すぎて…もつと広い私有地が欲しくなっちゃったの！　ってことで、チルノさつさと妖精を全員連れて広場から出て行きなさい！」

『な、なんだってー！　やはり本当の狙いはこの場所…　あたいたちの広場なのか！』

「チルノちゃん、そろそろしつこい」

『チキショー！　大事な遊び場を手放してたまるかア！　出て行かないもんねーだ！』

「そ、そうだよ！　急に来て『出てけ』だなんて理不尽すぎるよ！」

『のび太！　新しいバット買ったから殴らせろ！』並の理不尽だ！』

「『悪いなのび太、このゲーム3人用なんだ』にも匹敵する理不尽だよ！」

「まあまあ、落ち着きなって2人とも、まだ話は終わってないの」

サニーは指をチツチツチ　騒ぐな…　つと手話。

「私たちも鬼じゃないわ（西瓜じゃないので）、何もせずに理不尽な要求を呑んで貰おうだなんて思っていない　空腹の相手に自分

の顔を食べると強制する某正義の男、^{ほう}みたいに理不尽はしないわ」

<サニー、アニメが違っわよ>

背後のルナが指摘する。

ミスったのよ　と顔を赤らめたサニーは、チルノと大妖精に向き直り、ニヤリ…不敵な笑み。

「広場としても、心から楽しんで利用された方が本望でしょ！　つまり、私たち光の三妖精と、あなたたち霧の湖の妖精…遊び慣れている方が広場を利用する権利があるわ！」

『なるほどオー！』

「いや、チルノちゃん　納得しないで、立派な暴論だよ^{ほうろん}」

「どっちが遊び慣れてるかなんて実際に遊んでみなければ分からない…　つまり！」

サニーの合図と共に、ルナとスターは同時に1枚の大きな紙を広げた。

【激突！　派閥妖精！紛争！抗争！大乱闘！！　広場を手に入れるのは誰だ！？】

「チルノ！私たちと、遊び、で勝負よ！　あなたが勝てば、私たちは大人しく手を引いてあげる…　ただし！私たちが勝った場合、あなた達には全員そろって　ここを出て行ってもらっわ！」

『な…な…』

「チルノちゃん騙されないで！こんな勝負やる意味が『よかるう』チルノちゃああん！」

『確かに、サニーの主張にも一理あるわ』

「ないよ！一理も！チルノちゃん絶対に今の状況を理解してないでしょ！」

<まあまあ落ち着きなよ大妖精、そっちが勝負に勝っちゃえばいつも通り平和に遊べるのよ？ 自称最強のチルノがいれば大丈痛い痛い痛い痛い>

「誰よあんた！栗みたいな口しやがって！」

<ルナチャイルドです！>

ルナの髪が大妖精によって大変な事に。

「それじゃあルール説明ね！一度しか言わないから質問等は受けつけないわよ！」

『え？なに？ サニー、もっかい言って』

「……それじゃあルール説明ね！一度しか言わないから質問等は受けつけないわよ！」

「あ、ゴメン 私も聞いてなかった」

「……今からルール説明をするわよ！」

<え、サニーなんか言った？ もう一回いつて痛い痛い痛い>

「あんたは聞いたときなさいよ！ 口みたいな栗しやがって！」

<栗みたいな口です！>

ルナの髪が二度目の危機に瀕^{ひん}する。

「それじゃあスター！ 説明よろしく！」

「任せて下さい」

さらさらの腰まである黒髪でぱつっんヘアー、黒い瞳、大きな青いリボン。

かなり たれ目気味の両目をニコリとさせたスターサファイアは淡々とした口調で説明開始。

「今から私たち3人と個別に‘遊び’で勝負をして頂きます あくまでも‘遊び’ですので、弾幕を撃ったりだとか、スペルカードを使ったりだとかは危険行為、その勝負は反則負けとさせて頂きますので細心の注意を払って下さいね …特に、ルールを平気で忘れそうなおバカさんとかは」

「大ちゃん、いま スターが大ちゃんの悪口言ってたよ」

「ちょっと黙っててバカ」

「いまバカって言った？ 気のせい？ あ、気のせいかな」

何よアイツ 笑顔で人の親友に毒吐きやがって…

スターは悪びれた様子もなく大妖精に向かってニコニコと笑顔を飛ばしている。

大妖精の勘なのだが、こういう女が一番夕チが悪い。

へコホン、失礼 つまり、私たち光の妖精と計3回戦の勝負をするのです その結果、トータルで勝率の高い方がこの広場を獲得する権利が与えられる お分かりですか？

「さすがスターね！物凄く分かり易い説明だったわ、ご苦労様！」

『ちよつと待ったア！三妖精！異議あり！異議ありイ！』

おお！さすがのチルノちゃんでも この勝負の不平等条件に気づいた！

『サニーは後ろの2人と合わせて3人だけど、あたいらは2人しかないわよ！ 人数を誤魔化しやがって！ルール説明の時にピンときたわ！ 騙そうたってそうはいかないわ！』

え？ チルノちゃん、怒る所そこ？

「な、なに！？ バレただとオ！？」

「もう！どっちもバカ！」

くだから言っただろうサニー、この作戦では どんなバカでも引っかけられないと>

「ええ、そうですよ 私も栗も反対でしたのに」

<栗?>

「あーもう！うつさい！ だったら別の妖精を連れてくればいいでしょ！ ほら、チルノ！ さつさと もう一匹連れてきなさいよ！」

『えエー でも、こっから紅魔館までは結構の距離あるしい』

「あんたは誰を呼ぶ気なの？」

「連れてきたよ、チルノちゃん」

《まあ、巻き込まれるとは思ってたんだよ》

大妖精の連れてきたモブ妖精、これが加わり、完全に勢力は均衡した。

『ふっふっふ、あたい達に勝負を挑んだことを後悔させてやるわ 負けた後に泣いても、その涙まで全部凍らせて家まで運ばせてあげる！』

「そんな手土産ゴメンだわ 持ち帰るならそうねえ… 氷の妖精の負け惜しみかな？」

<全く… こんなイタズラに私を巻き込んで… もうちょっと本気で作戦を考えて（ブツブツ）>

《よく分かんねエが、姉ちゃんも苦勞してんだな》

「それでは良い勝負が出来ることを願って、始まりの握手でも」

「あら？スターさん どうして手の中に画鋏がびようなんて入っているのかしら？」

こうして、たくさんの湖の妖精が見守る中、霧の湖の妖精vs光の三妖精による仁義なき熱き戦いの火蓋ひふたが切って落とされた。

だい？わ 【光の三妖精あらわる】（後書き）

読破お疲れさまです。

はい、次回に続きます。

なぜか長編を書きたいと僕の中の妖精が騒ぎ出しまして。

これが困ったもので、僕の妖精は酷く自分勝手にめんどくさがり屋なんですよ。

なので、次回upが遅れる可能性があります。

それでは次回にお会いしましょう！

良かったらコメント（○○が原作と食い違っているね、○○で二次創作書いて〜など）下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7036z/>

あたいと大ちゃんのおそびにつき

2011年12月27日20時45分発行